



今年こそ『源氏物語』...あなたが選ぶ現代語訳は？

東京学芸大学教授 河添房江

2018年01月11日 10時19分

Tweet

紫式部によって書かれた『源氏物語』には、作家を引き寄せる魔力があるのかもしれない。明治時代から多くの作家らが、魅入られるように現代語訳に挑んできた。昨年9月には、角田光代の現代語訳『源氏物語』の上巻(河出書房新社、『池澤夏樹＝個人編集』日本文学全集)が出版され、その系譜に新たな一冊が加わった。新しい現代語訳が出るたびに違った顔を見せる『源氏物語』。それぞれの魅力を東京学芸大学の河添房江教授に解説してもらった。どれか一冊を手にとれば、あなたも『源氏物語』の世界に魅了されるはずだ。

世界中で愛される『源氏物語』



滋賀県大津市の石山寺にある紫式部像。紫式部は『源氏物語』を石山寺で起筆したという伝説が残っている

現在、『源氏物語』が世界でどれくらいの言語に翻訳されているか、ご存じだろうか。答えは、何と33の言語に訳されているのである(伊藤鉄也氏「海外源氏情報」のサイト)。英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、韓国語はもちろん、リトアニア語、タミル語といった言葉もある。世界最古の長編小説と言われる『源氏物語』は、世界各地の人々に読まれていることがわかる。

日本語の現代語訳も、明治から大正にかけての与謝野晶子の『新訳源氏物語』にはじまり、昭和に入ると同じく晶子の『新新訳』と谷崎潤一郎の三つの訳が有名である。戦後の現代語訳も円地文子や田辺聖

子、平成に入っても橋本治、瀬戸内寂聴、大塚ひかり、林望と続いている。『源氏物語』はその時代にフィットする形で何度も訳されているのである。

気負いのない文体の角田源氏

そして最も新しい現代語訳が、昨年9月に上巻が出た角田光代『源氏物語』である。角田訳では原文に主語を補い、敬語を省略して読みやすくしているし、大事な言葉には注釈のような説明を補う親切さもある。だが、それはこれまでの現代語訳でも試みられてきたことで、角田源氏の際立った特徴というわけでもない。

特徴をあげるとすれば、むしろ「である」調で訳された気負いのない淡々とした文体だろう。桐壺巻で帝が桐壺更衣の死を知った場面を例に、解説してみたい。原文は以下のようになっている。

御胸のみつとふたがりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行きかふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせつるを、「夜半うち過ぐるほどになむ、絶えはてたまひぬる」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて帰り参りぬ。聞こしめす御心まどひ、何ごとも思しめしわかれず、籠りおはします。(『新編日本古典文学全集 源氏物語(1)』小学館より)

帝は実家に帰った桐壺更衣のことが心配で夜も眠れない。そこへ使者が戻ってきて桐壺更衣が亡くなったことを知らせる。自分が深く愛した女性の死に帝はひどく取り乱してしまう、といった内容である。

帝が主語となっているので、原文は二重敬語(敬語の部分は太字で示した)が多く使われている。比較のために、瀬戸内寂聴訳でどうなっているのかを見てみよう。

帝はその夜は淋しさと不安でお心がふさがり、まんじりともなさらず、夜を明かしかねていらっしやいました。お里へお見舞いにやられたお使いが、まだ帰ってくる時刻でもないのに、気がかりでたまらないと、しきりに話していらっしやいました。

更衣のお里では、
「夜なかすぎに、とうとうお亡くなりになりました」

と、人々が泣き騒いでいるのを聞き、勅使もがっかり気落ちして、宮中へもどってまいりました。それをお聞きになった帝は、御悲嘆のあまり茫然自失なさり、お部屋に引き籠っておしまいになります。

敬語を丁寧に訳出していくと、現代の読者には少しくどいように感じられるのではないだろうか。この部分、角田訳は非常にシンプルである。

深い悲しみに沈み、帝は眠ることもできず、夏の短い夜に目をこらす。女の実家に遣わせた使者がまだ戻らないうちから、帝は不安な気持ちをしきりにつぶやいていた。
その頃、女はすでに息絶えていた。お付きの人々が泣き騒ぐ女の実家から、気落ちして戻ってきた使者は、「夜中を過ぎる頃、とうとう息をお引き取りになりました」と伝えた。それを聞いて帝はひどく取り乱し、もう何も考えることができず、部屋に閉じこもってしまう。

角田源氏の一番の魅力は、『源氏物語』を現代小説のように違和感なく、さらりと読めるところにある。もともと、原作で語り手が直接読み手に語りかけたり、感想や批判を述べたりしているところ(専門用語で「草子地」という)だけは「ですます調」となっていて、現代の語り手である角田が感情移入しているかのようである。

巻名に添えられた言葉に深い意味

さらに私が感心したのは、巻の扉のページである。そこには巻名があり、その下に短いキャッチコピーのような言葉が書かれている。例えば若紫巻ならば、「若紫 運命の出会い、運命の密会」といった具合だ。

このキャッチコピーに私はしびれてしまう。「運命の出会い」とは、いうまでもなく後に紫の上とよばれる少女に、光源氏が北山で出会ったということである。「運命の密会」とは、少女の叔母であり光源氏が永遠の思慕を寄せる藤壺との密会が成立したことを意味する。この短い文字の重ね方に、角田源氏はなんと重い物語の内容を込めていることか。

同様に感心したのは、「夕顔 人の思いが人を殺める」。つまり、夕顔巻は六条御息所という人が、物の怪となって夕顔という人をとり殺す巻というのである。「葵 いのちが生まれ、いのちが消える」も好きな要約で、夕霧という源氏の長男の命が生まれ、母の葵の上が六条御息所の生霊により命を落とすことを表現している。

男性的な与謝野源氏、関西の女語り意識した谷崎源氏

それでは他の現代語訳の特徴はどのようなところにあるのか。まず明治から大正にかけての与謝野晶子『新訳源氏物語』（金尾文淵堂、1912—13年）はダイジェスト訳だが、晶子晩年の『新新訳源氏物語』（同、38—39年）は全訳である。

夕顔巻の一節の現代語訳を比較（図表参照）してみた。与謝野源氏はいずれも口語体で、主語を入れ、敬語を省いた短文で書かれている。男性的で歯切れが良く、入門編としてふさわしい。晶子が狙ったのは、『源氏物語』の精神は生かしつつも、古風な女語りの文体から距離を置き、近代小説として再生させるところにあった。

なお『新新訳』は戦後、河出書房の日本文学全集に加えられて大ヒットし、谷崎源氏と並んで現代語訳の双璧と言われた。現在は角川文庫のほかにもネットでも見ることができ、無料で読めるのも魅力である。

谷崎潤一郎の三つの現代語訳は、原文の敬語を生かして丁寧語を多用し、継ぎ目のない長文で主語も入らず、初心者にはやや難しい。しかし、読解力のある読者にとっては、魅力ある訳である。関西の女語りを意識した、流麗な雅文体の訳で、谷崎にとっての理想の日本語の文体を追求したともいえる。

戦前の『潤一郎訳源氏物語』（中央公論社、39—41年）では時節柄、天皇家の不敬に当たる部分を3か所削除した。戦後の『潤一郎新訳源氏物語』（同、51—53年）はそれを正し、その後の『潤一郎新々訳源氏物語』（同、64—65年）は、旧仮名や旧漢字を読みやすく改めたものである。

格調高い円地源氏、創作が加えられた田辺源氏

円地文子『源氏物語』（新潮社、72—73年）は、男性的なしっかりした文体で、主語を加え、注釈的な部分を文中に織り込んで、わかりやすく仕立ててある。その文体は格調が高く、文学的な香気が感じられる。また女流作家の訳らしく、車争いや生霊事件での六条御息所の心理分析など、内面の読み取り方は鋭く深い。

田辺聖子『新源氏物語』（同、78—79年）は、もともと『週刊朝日』に連載されたもので、男性にもわかりやすい物語を目指し、原典に大幅なリライトが加えられている。会話を多用した一種の現代小説のようで、大和和紀の源氏漫画『あさきゆめみし』にも影響を与えた。巻名も「眠られぬ夏の夜の空蟬の巻」から「夢にも通えまぼろしの面影の巻」まで、巻の内容を要約しつつ洒落^{しゃれ}ている。

光源氏を近代的に描いた橋本治、人生観重ねた瀬戸内寂聴

橋本治『窈窕 源氏物語』（中央公論社、91—93年）も忠実な訳というより、一種の翻案小説である。光源氏はナルシスト、かつニヒリストとして描かれ、女性に対しても思いやりに欠け、その近代的な男主人公の視点から物語は紡ぎ出されていく。文体は「私は」という主語を多く使い、敬語を省略した英文翻訳体

で、自然をはじめ描写は細緻である。華麗なる書き言葉を駆使して、『源氏物語』を日本の古典というより世界文学として押し出そうとする意識が強い。

瀬戸内寂聴『源氏物語』（講談社、96—98年）は、ですます調の語り口調で、中学生でも読める平易な日本語で訳されている。各巻の最後には「源氏のしおり」という解説が付き、書かれていない紫式部の本音がわかる仕掛けで、出家した瀬戸内の人生観も重ねられている。刊行された頃は講演会や朗読会など、メディア・ミックスによる宣伝効果もあり、かつてないヒットを飛ばした。文庫化でさらに読者の裾野を広げ、若年層の古典離れを防ぐだけでなく、団塊世代の古典回帰も助けている。

リズム重視の大塚ひかり、熟語を多用した林望

その後、2008年は源氏物語千年紀の年として騒がれたが、前後して刊行されたのが『大塚ひかり全訳源氏物語』（ちくま文庫、08—10年）と、林望『謹訳 源氏物語』（祥伝社、10—13年）である。大塚は『「源氏物語」の身体測定』『カラダで感じる源氏物語』など、身体から読み解く源氏エッセイの著者として知られる。

『全訳』はわかりやすい逐語訳で、「ひかりナビ」と称する注釈の説明文を付けている。訳文を自分で音読し、原文のリズムを損なわないよう心がけたともいう。

一方『謹訳』は、出版社のうたい文句が「品のある日本語ですらすら読める」である。しかし、実際の文章は近世書誌学者の林らしく、漢字の熟語を多用する教養主義の訳文で、すらすら読めるのはそれなりに教養のある読者だろう。また注釈をすべて現代語訳に入れているため、原文一つ一つがかなりの長文で訳されている。

次々と生まれる価値、『源氏物語』の生命力



『源氏物語』の世界は今なお多くの人を魅了し続けている(写真はイメージです)

以上、駆け足で明治から現代までの現代語訳をたどってきたが、初期の与謝野源氏や谷崎源氏の特徴は、『源氏物語』を現代語訳する営みのなかで、それぞれが理想とする日本語の文体を追求したところにある。

与謝野晶子が狙ったのは、『源氏物語』を西洋の翻訳小説のように言文一致体で翻訳し、モダンな小説としての装いを強化することだった。一方、谷崎潤一郎は過剰なまでの女装文体を選ぶことで、王朝物語としての『源氏物語』を再創造しようとした。

また谷崎は3度も訳を出すことで、『源氏物語』を訳すことが作家としての仕事の集大成であり、国民的作家である存在証明ともした。瀬戸内寂聴もそれを受けて、国民的作家としての訳業を意識しており、世界文学として押し出そうする橋本治の『窯変』とは対照的である。

1000年の時空を超えて、今も読み継がれている『源氏物語』には、様々に読み解かれてきた歴史がある。古くは和歌や政治の指南書、後には女子教育の教科書、「もののあはれ」論など、時代の関心や要請に応じて、この物語はその価値を変えてきた。

現代語訳に限っても100年以上の歴史があり、様々な訳が生まれている。『源氏物語』の生命力、その豊饒さ、汲めども尽きぬ魅力には驚嘆するほかない。さらに世界各国での翻訳を加えてみれば、それぞれの訳が放つこの物語のイメージは、あたかも万華鏡のごとく多彩である。

現在進行中の角田光代訳がやがて完成した時、『源氏物語』にはどのような新たなイメージが加わるのだろうか、興味は尽きないのである。

夕顔巻の原文の一部をそれぞれの現代語訳で比較すると	
原文	夕顔につ物に、いと青のなる葉の心地よげにほひのやあるに、西き色ぞ、赤のあひとり笑みの露のらけたる。「もちかた人にも申す」とけりこもたまふ事、 <small>(『源氏物語(上)』の中巻より)</small>
与謝野晶子【新訳】	その葉の露のような形に葉葉とした葉草が一面にまっはつて居て、赤い色が気持よく輝き咲いて居る。「晶子は以下を省略している」
与謝野晶子【新訳】	保護しのような物に葉葉とした葉草が静かに咲いて居る、その白のいさむけがその露で居る河よりもほろほろな形で笑つて居た、そこに白く咲いて居る赤の花の葉草と居る葉草の間に居る。
谷崎潤一郎【新訳】	夕顔のいた葉草の心、たいそう青々とした葉草が心地よげにほひをうつて居て、白い色が自分ひとりの笑みように咲いて居る。「源氏人に物申す」と、嬉しごとをおっしゃいますと。
谷崎潤一郎【新訳】	夕顔のいた葉草の心、たいそう青々とした葉草が心地よげにほひをうつて居て、白い色が自分ひとりの笑みように咲いて居る。「源氏人に物申す」と、嬉しごとをおっしゃいますと。
谷崎潤一郎【新訳】	夕顔のいた葉草の心、たいそう青々とした葉草が心地よげにほひをうつて居て、白い色が自分ひとりの笑みように咲いて居る。「源氏人に物申す」と、嬉しごとをおっしゃいますと。
内田文子訳	夕顔のいた葉草の心、たいそう青々とした葉草が心地よげにほひをうつて居て、白い色が自分ひとりの笑みように咲いて居る。「源氏人に物申す……」 源氏の葉が青々とした葉草の心よげにほひをうつて居る、その葉に、赤い色が自分ひとりの笑みように咲いて居る。 「うちこそ源氏人に物申す……」と源氏に居ると、青々とした葉草の上の葉草の間に居ると。
野宮聖子【新源氏物語】	夕顔の心、青々とした葉草がからみついて、白い色が、わがもの顔に咲いている。 「うちこそ源氏人に物申す……」と源氏に居ると、青々とした葉草の上の葉草の間に居ると、青々とした葉草の上の葉草の間に居ると、青々とした葉草の上の葉草の間に居ると。
橋本治【新訳】	ふと居ると、緑色の葉草の間にちやうどちやうど赤い色に、青々とした葉草が咲き出さずとも居る、その葉草は、赤い色の葉草の間に居ると、そこに夢のような白い色が、小さな赤色の葉草の間に居ると、そこに夢のような白い色が、小さな赤色の葉草の間に居ると、そこに夢のような白い色が、小さな赤色の葉草の間に居ると。 「うちこそ源氏人に物申す」とひとごとのように居ると。
藤村有樹訳	夕顔のような葉草の心、静かな青々とした葉草が気持よくまっはつて居て、白い色が自分ひとりの笑みように咲いて居る。「そちらの方にもつとお尋ねします。そこに咲いているのは何の花」と源氏の葉草がひとごとのようにつぶやかれますと。
大塚ひかり【全訳】	夕顔の葉草の心、静かな青々とした葉草が気持よくまっはつて居て、白い色が、自分一人、笑みの露を咲いて居る。 「もちかた人にも申す」一語の心にお尋ねしたい……と、君が秋の露を言う。
林望【新訳】	門の中に、また緑色の葉草が立てて居て、そこに静かな緑色の葉草が心地よげにほひをうつて居る、源氏は低い声で、赤い葉草の間に居ると、そこに夢のような白い色が、小さな赤色の葉草の間に居ると、そこに夢のような白い色が、小さな赤色の葉草の間に居ると。 「うちこそ源氏人に物申すおれ、そのそこに白く咲くのは何の花ぞも(口語訳)」 そんな歌をひとりごとのように居ると。
角田光代訳	夕顔の葉草の心、青々と居た葉草が居る、白い色がひとつ、笑みように咲いて居る、この花は何だろうかと思つた天君が、 「うちこそ源氏人に物申すおれそのそこに白く咲くのは何の花ぞも(古今集/口語訳)」という古歌から「源氏人に物申す」とひとごとにつぶやくと。

プロフィール

河添 房江(かわぞえ・ふさえ)

東京学芸大学教授。一橋大学大学院連携教授。1953年生まれ。専門は『源氏物語』を中心とした平安文学。85年、東京大学大学院人文科学系研究科博士課程単位取得退学。著書に『源氏物語と東アジア世界』(NHKブックス、2007年)、『光源氏が愛した王朝ブランド品』(角川選書、08年)、『唐物の文化史 舶来品からみた日本』(岩波新書、14年)などがある。